

# 病理の未来を考える ～サクラ病理技術賞と私～



- 松野 吉宏** 先生 サクラ病理技術賞 選考委員長 第8回～15回：北海道大学病院 病理部 部長・教授  
**牛久 哲男** 先生 サクラ病理技術賞 選考委員長 第16回～：東京大学大学院 人体病理学・病理診断学 教授  
**雨宮 健司** 先生 第14回サクラ病理技術賞 受賞者：山梨県立中央病院 ゲノム解析センター  
**木下 勇一** 先生 第14回サクラ病理技術賞 受賞者：和歌山県立医科大学附属病院 中央検査部 病理診断部門  
**高鳥 光徳** 先生 第14回新人賞 受賞者：熊本大学 ヒトレトロウイルス学共同研究センター

令和5年5月に新型コロナウイルス感染症が2類感染症から5類感染症に移行し、第15回サクラ病理技術賞授賞式は4年ぶりに対面形式で開催された。選考委員長ならびに受賞者の方々が一同に会するのは久しぶりのこととなった。節目の第15回を迎え、次回から選考委員長が交代することを機に、本賞をテーマとした初めての座談会を開催した。

## サクラ病理技術賞の独自性とは

最初に松野先生に現選考委員長としてのお話を伺いたいと思います。選考委員長のオファーがあった時、どのようなことをお考えになりましたか。

**【松野】**世の中には学会の賞なども含めて様々な顕彰制度があります。しかし、病理分野の検査技師や研究者の方々に光が当たる場が少ないと感じていました。前任の真鍋俊明先生(当時、京都大学)からバトンを受け取る形で選考委員長のお話をいただいた時、私は企業のサポートを受けながらそこに光を当てることができるのかと強く思ったことを覚えています。私にとって非常に新鮮な驚きであり、大変やりがいのある仕事になるだろうと感じました。

——牛久先生はサクラ病理技術賞をどのように捉えていらっしゃいましたか。

**【牛久】**選考委員長のお話がある前からこの賞の存在は知っていました。私は2017年に東京大学医学部附属病院の病理部部長に就任しましたが、その日以来、病理技師の方々にはこの賞に応募できるような活動にも力を入れていきたいと思います。しかし、その時は病理技術的な貢献、論文発表に対しての賞だと思っていたのです。今回、関わってみてこ



松野 吉宏 先生

## 病理の未来を考える

### ～サクラ病理技術賞と私～

の賞が研究や技術だけではなく、後進の育成も含めて幅広い病理分野における活動に対してのものであることがわかりました。

——松野先生、サクラ病理技術賞の特徴はどのような点にありますか。

**【松野】**サクラ病理技術賞の趣旨は病理分野の優れた学術や新しい技術開発を発掘するだけでなく、今後の技術開発や研究の基盤となるような病理技術の伝承も謳っています。その点はサクラ病理技術賞が他の顕彰制度とは異なるポイントの一つと考えています。

学術的な成果だけを評価する場合は、学会や学術誌などいろいろあります。そうした点は意識していました。

#### 受賞者はサクラ病理技術賞をどのように捉えていたか

——次は受賞者の皆様にお話を伺います。ご自身のどのような点が評価されたと思われましたか。



雨宮 健司 先生

**【雨宮】**私の場合はがんゲノム医療が始まるか、始まらないかという時期にこの賞のことを知りました。2013年、山梨県立中央病院にゲノム解析センターが設立され、私は病理・細胞診検査と並行してゲノム解析業務

に関わるようになります。

当時、次世代シーケンサー (Next Generation Sequencing; NGS) を使用している医療施設はほとんどありません。「FFPE 検体から網羅的遺伝子解析ができますか」と企業に質問しても「あまり情報がありません」といった状況でした。がんゲノム医療における FFPE 検体の精度管理は業務上どうしても必要だったので、時間も十分にいたので、ちょうどいい時期に論文をまとめることができました。

**【木下】**サクラ病理技術賞を受賞する2年前に日本臨床細胞学会の技師賞を受賞しています。翌年、知人から「そろそろサクラ病理技術賞に応募してみたら」と言われましたが、自信がなかったので断りました。推薦してくださる先生や応援してくださる方々に恥をかかせたくないという気持ちがあったからです。それでも応募するかどうか迷い、ある人に相談しました。その人からは「私から推薦状は出せないけれど、応募してみたら」と言われました。私はその一言を聞いて応募することにしました。その結果、受賞させていただいたという次第です。

**【高鳥】**私の研究は成人 T 細胞白血病・リンパ腫 (ATLL) の診断を FFPE 標本で行うというものです。しかし、そこに行き着くまでにはこれまでの診断法の検証、新しい技術の検討など様々なことを行わなければなりません。博士課程の指導教授と日々技術的な方法論について議論させていただきました。自分の研究室で行う段階になった際、研究室全員で取り組むことができたことも成功の一因だと思っています。

技術は検査技師が担い、診断は医師が行う、そう思いながら新しい診断方法を開発しました。そのことがサクラ病理技術賞で認められたことは大きな喜びとなっています。

——技術は検査技師が担い、診断は医師が行う、牛久先生はこの意見についてどのように思われますか。

**【牛久】**私もその通りだと思います。病理医は病理分野でどのようなことが求められているのか認識しています。それに必要な技術を検査技師が持つという形が最も理想的でしょう。両者の関係性が良好であれば、病理医側から「これをやってみないか」と言うこともできます。ただ、時間の確保は課題となります。

**【松野】**ATLL の診断の場合、長年、形態でしか診断できず、ウイルスの存在を可視化できなかった。それをきちんと可視化して証明す

るというテーマを高鳥先生は手に入れることになった訳です。そこを目指そうと思った自分自身、あるいはそのように差し向けた指導者の勝利だったように思います。しかし、それを実現するには実行力や突破力が必要となる。そのためには教室あるいは検査室全体として「その研究をサポートする」、「研究のための環境を整える」などの努力をしなければなりません。

もう1つ重要なのは病理検査室、あるいは教室単位で新しい活動に取り組んでいく姿勢でしょう。地域で様々なセミナーや講習会を行い、地元で頑張っている検査技師同士が情報共有するような雰囲気を作る。これは指導者の裁量によるところも大きいのですが、そうしたことも考える必要があります。

受賞者の方々のお話を聞いて、本人の努力はもちろんですが、改めて恵まれた指導者や教室、検査室の雰囲気的重要性も感じました。

——第14回受賞者の皆さんは受賞して1年が経過した訳ですが、ご自身の仕事にどのような変化があったでしょうか。



牛久 哲男 先生

## 病理の未来を考える

### ～サクラ病理技術賞と私～

**【雨宮】** 私はサクラ病理技術賞で第10回に新人賞、第14回に技術賞をいただきました。第10回の授賞式では交流の場も設けられ、そこからいろいろな関係が生まれました。それがここ5年間の活動に結びついていると感じています。この賞で実感したのは人との繋がりです。教育や研修など人を巻き込んで物事を進められるようになりました。

**【木下】** 私の場合、研究が難しいのではないかと考えられている分野に意識して取り組んできました。現在、取り組んでいるテーマもニッチな分野で成果の出にくい難しいものです。逆に言うと、ごく普通の症例報告や免疫染色の検討などを発表したら「木下くんの研究、普通になっちゃったね」と言われるような気がしますし、サクラ病理技術賞をいただいたからはさらにそうした思いが強くなったりしています。

**【高鳥】** 私は臨床から離れて、現在は研究の仕事が中心となっています。科研費が採択されて、研究が進行している状況で

す。サクラ病理技術賞の新人賞をいただいて良かったと最も強く感じたのは、この賞を自分の経歴に書けるようになったことです。また、他大学の病理部に行くと先方から「あのサクラ病理技術賞を受賞した」と言われたりしました。受賞が名刺代わりになっている感じです。



木下 勇一 先生

#### サクラ病理技術賞への期待と課題

——次回の第16回から牛久先生が選考委員長になる訳ですが、今後の抱負について話していただけますか。

**【牛久】** 第15回の選考はオブザーバーとして参加しました。サクラ病理技術賞の選考は点数をベースに行いますが、議論を尽くすことを重要視しています。研究発表の場合でもその意義だけでなく、執筆者の地域での貢献、人となりなども選考基準となります。多面的な活動を評価するという選考に私は感銘を受けました。

松野先生が築いてこられた議論を尽くした公正かつ客観的な選考、これをしっかり引き継ぐことが重要だと考えています。この1年選考に関わり、この賞の価値が想像以上に高いことがわかりました。今後も責任感を持ってしっかりやっていきたいと思っています。

——現在、または将来サクラ病理技術賞に応募することを検討されている方がいらっしゃると思います。そういった方々に皆様からエールを送っていただけますか。

**【雨宮】** 受賞はひとつの到達点であり、これからの始まりでも

あります。私の分野ですと、細胞診由来少数細胞からの網羅的融合遺伝子検査、最近ではGenMineTOPを代表とするRNAを使用するパネル検査が始まりました。ホルマリン固定時間とFFPEブロック検体の保管期間によるRNA品質の影響など研究すべきテーマが次々と出てきます。自分の仕事を振り返るという意味でもどんどん応募した方がいいのではないのでしょうか。

病理分野はHE染色や免疫染色のような従来の技術と、遺伝子パネル検査のような新しい技術が並行して発展していくものと思っています。基盤技術とトレンド、両方の視点で選考しているサクラ病理技術賞は、まさに病理分野の在り方そのものを象徴しているように感じます。

**【木下】** 注目されなくても自分の仕事を地道に継続してきた人間を、人は見ていないようで見てくれています。そうした人間が賞を取ると、周囲の人達の心の中に自分も頑張ろうという気持ちが生まれる。それがひいては患者さんのためになり、地域貢献につながることに信じています。影日向に関わらず病理検査に貢献してこられたベテラン病理検査技師や指導者にこそ、医療の将来のために受賞して欲しいと考えております。



高鳥 光徳 先生

**【高鳥】** 同期の人間に投げかけてみるのですが、検討はしているが何を書いたらよいかかわからないと言われる。何をやりたいかを見出すには、まず誰かと話してみることが大切です。日常業務における疑問、こんな検査はできないかといったアイデア、そういった考えは医師や先輩技師と話すことによって生まれます。話し合いの中から自分が何に興味を抱いているのかを見出し、それがテーマになるのかどうか検討する。抱いた興味はそのまま研究申請書を書くためのイントロになり、研究の方向性を示すことにもなるでしょう。

**【松野】** 自分なんかと謙遜して応募することを躊躇してしまう、この業界には有りがちな話です。私はそういう方々にこそ光を当てたい。病理分野の方々にはサクラ病理技術賞が目指しているもの、どのような方々が受賞しているかなどを知って欲しいと思います。

**【牛久】** 応募者が増えて切磋琢磨されると当然、賞の価値が高まります。この賞の存在を知っていても、応募を検討するところまで至っていない施設が結構あるのではないのでしょうか。今後はさらにサクラ病理技術賞の存在を周知させていきたいと考えています。